

● 1年の各教材を紹介します。

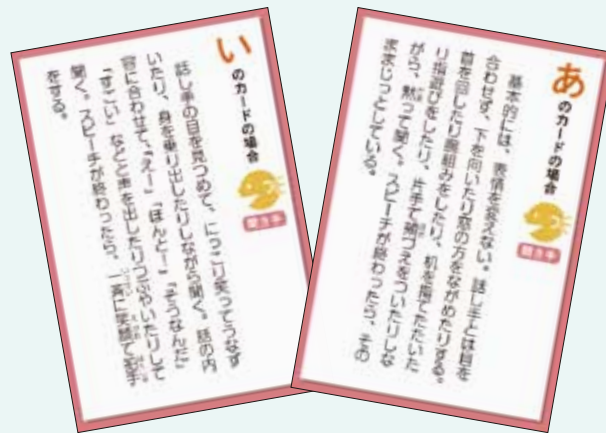
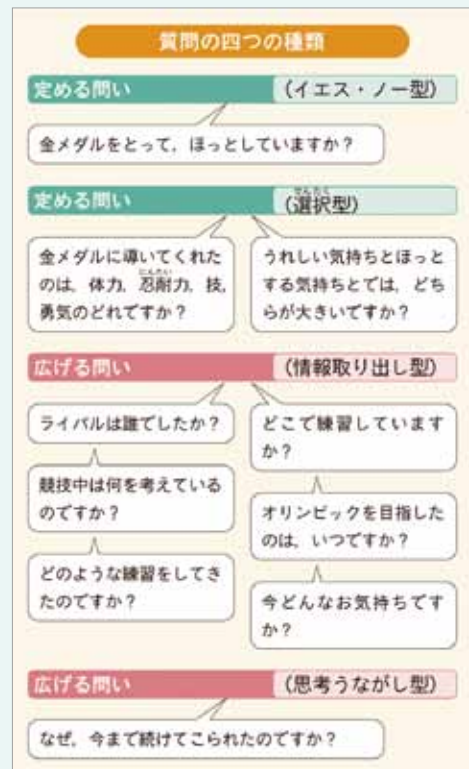
「書くこと」教材の学習過程にも「質問・対話」のプロセスを設定するなど、アクティブ・ラーニングの場を各所にデザインしました。

「対話・相談・会議」などの協働的問題解決(言語活動)の基盤となる場づくりやスキルを習得し、活用します。



↑1年「意見文 思いや感覚に向き合い、考えを確かなものに」(P.184)
※意見をつくる過程に「対話」を組み込んでいます。

↓1年「質問 チームの力を引き出す」(P.68)
※質問の4つの種類の話型や使い方を説明しています。



↑1年「スピーチ 聞き上手、話し上手になるために」(P.25)
※聞き手と話し手が相互に影響し合って場をつくっていることを実感できる教材です。

「話すこと・聞くこと」「書くこと」の教材では、学習の流れに沿って、わかりやすくレイアウトされた「身につけたい知識・方法のポイント化」「モデルの提示」「思考プロセスの図解(可視化)」が、①②③の実現のために有効

「学び方を学ぶ」ためには、①「何をどのように何のために行うのか」これからの学習(活動)の着地点・到達点がどこにあるのかを明確にすること、②それらを指導者と生徒が共有し、予測・確認・調整しながら学習を進めること、③学習活動を振り返り自己評価すること(自分のことばでまとめること)が重要です。

表現領域の学習のポイントは、思考力と表現(コミュニケーション)力を統合したかたちで育成することにあります。各教材の学習過程には、質問、対話、相談、ブレインストーミング、編集会議などの協働的、課題解決的な言語活動が組み込まれており、思考力と表現力を実践的・効果的に統合する学習が展開します。

これらの活動で体験する「協働の有効性や楽しさ」は、獲得した力や方法を次の機会に活用する動機を促進し、主体的な学習サイクルを生みだします。

「話すこと・聞くこと」「書くこと」の教材例

- [1年] 討論ゲーム 論理で迫るか、感情に訴えるか(P.136)
- [2年] 主張文 推論と対話で考えを広げる(P.88)
* 防災学習

- [2年] 地域情報誌 ふるさつを見つめ直す(P.216)
* 地域活性化
- [3年] 企画会議 合意を形成し、課題を解決する(P.96)
* 地域活性化

- [1年] 即興劇にチャレンジ(P.188) * インプロ・ゲーム
- [3年] ビブリオバトル(P.71)
- [3年] ワールド・カフェ 問いをもとに語り合う(P.181)

plan B

汎用的な能力を育成

話す・聞く、書く

「何を」「どのように」学ぶのかを明らかにして、協働の学びの基盤となるスキルや汎用的な思考力・表現力を、実践的に身につけます。

ゲームやシミュレーションをとおり、思考や表現の方法を体得・トレーニングするプログラム。

地域コミュニティとの連携・協働。

協働の学びの新しい流れ(実践)を積極的に教材化。

● 2年・3年の各教材を紹介します。

よい例と悪い例 モデルと自分の表現を比較することで、到達レベルを確かめながら、自己評価・自己調整を行うことにより、適正かつ実践的な力を身につけます。

悪い例	よい例
<p>海外に日本のよさを紹介するなら、やはりこれらの美しい自然です。私たちが世界に誇れる美しい自然は私たちの財産といえるでしょう。この風景を世界の人々に紹介しつつ、この美しさがいつまでも続くようにみんなで守っていきましょう。</p>	<p>美しい自然 →私たちの財産</p> <p>●世界の人々に紹介しつつ、みんなで守っていきましょう。</p>
<p>1枚のスライドにたくさんの情報を盛り込まない。文字量は、1枚に1～5行、1行の文字数にして5～15字程度を目安とする。</p>	<p>キーワードが引き立つような色使いや文字の大きさにする。</p>
	<p>発表のときは、書いてあることを読み上げるのではなく、示していない情報も加えて、聞き手に印象深く伝える。</p>

↑2年「プレゼンテーション 資料や機器を効果的に活用する」(P.42)
※生徒が作成するスライドやフリップの例として「改善が必要な例」と「よい例」を並べて提示しています。



文章構成のバタン

● 小論文は、「序論・本論・結論」の三段構成を基本とする。

● 本論部分を中心に二つに分けて、「序論・本論1・本論2・結論」の構成とする。

● 1000字程度の少ない文字数の場合は、本論の中心に二つに分けて、「序論・本論1・本論2・結論」の構成とする。

● 本論・本論1・本論2は、それぞれ「主張・理由・事例・説明」の構成とする。

● 結論は「まとめ」の構成とする。

● 序論は「導入」の構成とする。

● 序論・本論1・本論2・結論の構成は、それぞれ「主張・理由・事例・説明」の構成とする。

● 序論・本論1・本論2・結論の構成は、それぞれ「主張・理由・事例・説明」の構成とする。

● 序論・本論1・本論2・結論の構成は、それぞれ「主張・理由・事例・説明」の構成とする。

↑3年「小論文 論理の展開を工夫して、説得力をもたせる」(P.46)
※文章構成のバタンの提示とともに、それぞれの構成で書かれた文章を提示しています。

小論文のモデル
※400字の場合

■ 尾括型 三段構成 (序論・本論・結論)

よい友とはなんだろう。昔時法師は「後鳥羽」の中で「よい友」として「物をくれる友」「医術」「知恵のある友」の三つをあげている。確かに、こころい人が友達なら便利だし、いざというときには助かるだろう。ここで私が通知感を覚えるのは、「よい友がどうかを現実的な利益になるからならいかを基準に考えているように見えるのだ。もしも私なら、昔時法師の時代は、食糧事情や衛生環境の悪化から、「物をくれる友」「医術」「知恵」が重要だったのかもしれない。しかし、現代の私たちの社会で友人に求めるのは、物ではなく心だと思ふ。少なくとも私には、たくさん物をくれる人でも、医術や知恵を分けてくれたり、一緒に悩んでくれる人でも、友とは「よい友」とは思えない。友は心の交流から生まれるものだ。私にとってよい友とは、精神的に支え合う関係にある友である。

■ 頭括型/四段構成

私は、友とは相手からの行動を持っていて深まらないものだと思えます。一あのとき自分から声をかけていたら、もう友情が湧いたかもしれない。などという事は、多分の人々が経験していることでしょう。そのように思っているにも、実際に自分から手をかけるのは勇気がいります。もしも相手から何も言わずに勝手に思い込んでやることにならなければ、それは、自分が「さうなつたとして」それを「悪い」と思っているのではないかと考えているのです。世界的な映画監督の北野武さんも「友情」というのは、こちらから向こう一方向的に与えるもので、向こうから再られ向かってはいない。(『空想者』)といっています。見返りを考えて行動するのは友情とはいいないというこのこと、まず自分から行動に移す。私は、これが友情を深める第一歩だと思えます。